
常光徹先生を送る

小池 淳一

本館研究部民俗研究系教授、常光徹先生は2014年3月をもって本館を定年退職される。先生は1998年10月1日に本館に助教授として着任され、2006年4月に教授に昇任、2007年4月から一年間、総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻長を務められた。さらに2008年4月からの二年間は本館の副館長を務められ、本館および総合研究大学院大学の運営に多大な御尽力をされた。学界においても日本民俗学会会長、日本口承文芸学会会長を務められたほか、日本昔話学会運営委員などの要職を歴任された。なお、2006年11月には國學院大學から博士（民俗学）の学位を取得されている。

本館では企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・幽霊—」の展示プロジェクト代表、人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」展示プロジェクト副代表なども務められた。また多くの共同研究に参加されたが、なかでも「兆・応・禁・呪の民俗誌」では代表として共同研究を牽引され、その成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』第174集の〔特集「兆・応・禁・呪の民俗誌」〕(2012年)ほかにまとめられている。

常光先生の御退職にあたって、先生の略歴および研究の軌跡を紹介させていただきたい。先生は高知県の海岸部、中土佐町久礼にお生まれになり、少年時代を同地および同県の山間部である東津野村（現・津野町）で過ごされた。高等学校では社会科を坂本正夫先生から学ばれるなかで、民俗学にもふれる機会があった旨、うかがっている。卒業後、上京され國學院大學経済学部で学ばれた。國學院大學では白田甚五郎、野村純一両先生が指導されていた民俗文学研究会に所属し、口承文芸の調査と研究の手ほどきを受けた。学生を主体とする民俗学サークルのなかで、民俗研究の第一歩を記されたのである。そして日本各地に直接赴き、フィールドのなかで問題を発見し、それを解明しようとする姿勢を白田、野村両先生をはじめとする國學院の先輩の方々から学んでいった。さらに学部を卒業し、東京都の公立中学校の教壇に立たれるようになったのちも、調査を継続していった。大島廣志氏との共編『三右衛門話—能登の昔話』(1976年)は能登のおどけ者、三右衛門を中心とする、北陸の口承文芸調査の成果であり、花部英雄氏との共編『扇屋おつる—岩手衣川の昔話』(1987年)は奥羽における口承文芸調査の結実である。こうした地域を歩き、伝承者の語りに丁寧に耳を傾ける民俗研究の基本をふまえ、豊かな成果を挙げられる一方で、鈴木棠三先生に師事し、俗信をはじめとする断片的ながら深淵な民俗伝承の世界に関する思索と検討、資料の整備と分析にも取り組まれた。

先生の研究の大きな転機となったのは『昔話伝説研究』12号(1986年)に発表された「学校の世間話—中学生の妖怪伝承に見る異界的空間」であろう。この論文は副題に示されているように、伝統的な地域社会ではなく、先生が勤務されていた中学校において生徒たちが語っていた不思議な

話、怪談の類を聞き取り、従来の民俗研究が蓄積してきた資料群に劣らない多様な伝承が学校空間に息づいていることを提示したものである。この論文とその手法に学んで、多くのいわゆる「学校の怪談」が収集され、民俗学の新たな領域として認知される一方で、児童・生徒たちの世界にも『学校の怪談』（1980年～）として環流していくことになった。伝統的な地域における口承文芸の調査研究に近代的な空間における口頭伝承の存在を加え、広く紹介することにより、現代における民俗研究の新たな可能性が切りひらかれたのである。常光先生はこうした民俗学的な視点を現代社会に生かす姿勢を、多くの児童書の執筆を通して示されてきた。先生はこうした「発見」が、所属されていた日本民話の会における松谷みよ子氏の「目の前の伝承を見つめてみたら」という示唆によるものであることを後に回顧されている（『学校の怪談—口承文芸の展開と諸相』、1993年、あとがき）が、学部学生時代からさまざまな昔話・伝説・俗信に耳を傾け、断片的な習俗とその表現を大切に拾い上げる姿勢があつてこそ、それは可能になったといえるのではないだろうか。

1991年3月に長年務められた中学校の教壇を去り、学習院大学、桐朋学園芸術短期大学、國學院大學、成城大学などの講義を担当されながら研究を深められ、1998年10月より、本館民俗研究部に着任された。その後の御活躍は冒頭に記した通りであるが、研究の上でも、口承文芸から俗信を含むより広い対象を取り扱うように大きく展開、発展を期されたことを指摘しておきたい。『親指と霊柩車—まじないの民俗』（2000年）、『しぐさの民俗学—呪的世界と心性』（2006年）、そして近著の『妖怪の通り道—俗信の想像力』（2013年）などにまとめられた、民俗研究の本願ともいうべき、まじない・俗信の研究がそれである。身近な生活のなかに現在でも息づいているまじないや俗信を、丹念な実地調査に加えて、多くの民俗誌や民俗調査報告書からも拾い上げ、それらを貫く論理と歴史的な展開過程とをたどることを志向した研究は、民俗学の現代社会における可能性を示したものとして江湖に迎えられている。

本館での常光先生の御業績として逸することができないこととして、「怪談・妖怪コレクション」の収集がある。これは、主として近世以降の庶民文化のなかで、怪異や妖怪に関する絵画や記録・文書資料を継続して集められたもので、類のない貴重な資料群として全国的に知られている。心意や精神世界の反映としてのこうした資料の存在と収集は、文献史学や考古学が描く歴史像とは異なる文化史、心性史研究の基礎的な部分を構成するもので、研究博物館としての本館の枢要なコレクションとすることができる。また多年にわたって整備を進められてきた「俗信データベース」は、民俗学が蓄積してきたこの分野の資料を容易に検索、利用できる画期的なものである。こうした研究の基礎的な部分の充実を図られてきたことは、今後の研究の発展の種を植えたものとして特筆されるであろう。

先生はこうした本館や学界における多方面にわたる御活躍の一方、温厚篤実、広範な視野と柔軟な研究姿勢から多くの大学への出講を乞われ、さらに総合研究大学院大学での指導などを通して多くの学生を育て、学位取得まで導かれてきた。こうした教育面での御功績もまた顕著である。加えて席席などでの誠実かつ洒脱な談話は同僚の私たちに有形無形の薫陶を及ぼしてきた。先生の御退職は本館にとっては大きな損失であるが、残された私たちは、先生が在職中に示された研究に対する姿勢をたどりつつ、一層の発展に努力することを期したい。末文ながら、先生のますますの御発展と御健勝とお祈り申し上げます。